

Gottes Spiel

~ Jakob Böhmes Gottesbegriff ~

Yasuo OKAMURA

Böhmes Begriff von Gott ist sehr lebendig und dynamisch. Das Leben Gottes ist nach ihm nicht ein bloßer "Progress", sondern zugleich "Regress", also macht eine "Kreisbewegung". (Franz von Baader)

Wir können diesen "Urstand" von Gott durch "zwei Prinzipien" oder "sieben Qualitäten" schildern. Zwei Prinzipien, z.B. die ewige Finsternis und das ewige Licht dringen sich in dem "Urstand" durcheinander. Und sieben Qualitäten beziehen sich dort auch ewig aufeinander. Wir nennen diesen ewigen wechseldurchdringenden Zustand von zwei Prinzipien oder sieben Qualitäten "Gottes Spiel". Das Wort "Spiel" drückt hier ein ursprüngliches, sich wiederholendes und wonnenvolles Bewegen Gottes aus. Vielleicht hat Böhme es aus seinem religiösen Urerlebens herausgenommen. Das ist aber dem traditionellen und christlichen Begriff von Gott sehr fremd. Also können wir in solchem Ausdruck von Gottes Urstand einen heterodoxen riechen. Aber finden wir darin auch positiv eine "Offenheit" von Böhmes Denken, in der das theologische "Getto" gebrochen und ein anderer Logos als der christliche verstehen werden kann. Und in dieser Offenheit suchen wir auch eine Möglichkeit, die in dem ganz anderen Kontext liegende Religion zu verstehen.

神の戯れ

～ヤーコプ・ベーメの神～

岡村康夫

はじめに

「無底 (Ungrund)」はベーメ思想の究極概念であり¹、すべてのものがそこから由来し、そこへと還るところを意味する。それは彼の思索、いわゆる「神智学的 (theosophisch)」思索のなかでは、そこからすべてのものが、すなわち神自身すらも誕生するところを意味し、また彼の実践的教えのなかでは「魂 (Seele)」が一切を「放下 (verlassen)」し、「無 (Nichts)」となることによって、そこへと還るところを意味する²。ベーメの「無底」には先ずこのように理解できる側面がある。ただし、そこではまだベーメの「無底」の意義は充分尽くされていない。というのは、「無底」は他面そのようなそこからそこへというようなあり方をつねに否定して初めて「無底」だからである³。

さて、「無底」は「無にして一切 (ein Nichts und doch Alles)」(XV, 5)であると言われるが、そこにはすべての根拠づけを拒否する働きと同時にすべてを積極的に定立する働きとがある。あるいはむしろその両方向への働きそのものが「無底」であるとも言える。拙論ではこの「無底」の根源的動態の一表出を「戯れ (Spiel)」という言葉のうちに捉える⁴。ベーメの叙述展開のなかに「神の戯れ (Gottes Spiel)」という言葉が見出される。それは世界創造以前の神の根源的動きを意味する。ただし、それは単なる永遠の世界の永遠の出来事に終わらない。魂は「無」となり「無底」へと還ることによって、この「神の戯れ」に参画する。そして、この魂の参画によって「神の戯れ」はますますその喜びを増幅し、そこに「無底」はその本来のあり方を現出する。というのは、魂が「無」となることによって初めて「無底」は単なる「根拠 (Grund)」あるいは「基体 (Subjectum)」としてのあり方を脱却し、その「嬉戯 (Freuden = Spiel)」のなかで神と魂との真の交互透入の関係が実現されるからである⁵。そして、さらにそこに一切が一切から自由となる「無底的自由 (ungründliche Freiheit)」の世界が現成するからである⁶。したがって、そこには「無底」を核に、ベーメ独自の神・魂・世界の理解が開示されていると言えるのである。

さて、以上のような意味での「無底」をベーメはしばしば「エゼキエルの車輪」に譬えている。それはエゼキエルがケバル川の畔で見たという「神の幻」の形容に由来するものであるが⁷、ベーメはそれを「あらゆる方向に進む丸い球形の車輪 (rundes Kugel=Rad, das auf alle Seiten gehet)」（Ⅷ, 101）であると言う。そして、この「車輪」こそまさにベーメにおいては神の「根源態(Urstand)」を指示するものであると同時に、その「神の似姿」である魂の根源的あり方を表わすものである⁸。すなわち、それは「あらゆる方向に進む」と言われ、キリスト教的目的論的動き以前の喜びに溢れた神の様相を示すものであると同時に、その目的論的動きを通して、言わばそれ以後あるいはそれ以上のところへ参入した魂の自由無碍な姿を表わすものでもある。

以上のような「無底」に関するベーメの思索を中心として、拙論では最終的にはキリスト教的ロゴスのうちに閉塞されない彼の思索の根源的開放性について論究したい。というのは、彼を真に「ドイツの哲学者(Teutonicus Philosophus)」と名付ける意義がそこにあると考えるからである。それは彼の思索が後のドイツ観念論者において取り上げられたということに留まらない¹⁰。例えば、ベーメの思索の由来するところとして、パラケルズスやカスパー・シュヴェンクフェルトやヴァレンティン・ヴァイゲル等の名前が上げられ¹¹、さらにはグノーシス¹²やカバラ¹³との関連を探る研究もある。ベーメの著述を読むと、確かに至る所にそれらの痕跡を認めることができる。ただベーメの場合、いずれにしてもそれらは単に外から付け加えられたものに終わってない。それらはベーメのうちへ内在化され、彼の体験を核として再把握されたものとなっている。そのような思索をベーメが成し得るところに、彼の到り得た宗教的生の「深み(Tiefe)」を読み取ることも可能であろう。そして、それが彼の思索を根源的に開放し、彼に「自由な思索(freies Denken)」¹⁴を可能としたものであると言えるであろう。勿論、彼の思索の出発点はキリスト教的ロゴスにある。そして、特にその弁明の視点は飽くまでキリスト教的である。しかし、その思索の究められるところには異質のロゴスとの接触・交流の可能性が開かれている。例えば、錬金術やユダヤ神秘主義との関わりがその一つとして上げられるであろう。そして、殊に「無底」を巡る彼の思索は、更に全く異なる歴史的・宗教的文脈にあるものとの対話を可能にするであろう。拙論ではこのような視点から彼固有の思索の世界を明らかとしたい。

註

- 1 ベーメの著作において初めてこの概念が現われるのは1620年の『魂についての四十の問い(Psychologia vera)』(IV, 11)においてである。但し、その発想の萌芽となるものは既に1612年の彼の最初の作品の『黎明(Aurora)』あるいは1619年の『人間の三重の生について(De Triplici vita hominis)』のうちにも認められる。例えば前者の「神性の深み(die Tiefe der Gottheit)」(I, 73)、あるいは後者の「無底的(ungründlich)」な「初まり」および「終わり」(III, 40)等の言葉が現われる文脈を参照。

(以下、ベーメの著作からの引用は Will-Erich Peuckert によって1989年に復刻された全集版に拠って、巻数および頁数の順に表記する。)

- 2 ベーメの著作はその内容から大別すると、①神智学的著作と②神秘主義的著作および③自然神秘主義的著作とに分類されるであろう。①の代表作は『大いなる神秘(Mysterium magnum)』(XVIII)であり、②のそれは『キリストへの道(Christosophia)』(IX)であり、③のそれは『諸物の印(De signatura rerum)』(XIV)であると言えよう。①は「無底」を頂点とし、そこから神・世界・人間の由来に言及する著作、いわゆる形而上学的著作に属する。但し、その内容を理解するためには、ベーメ自身が繰り返し述べているように、我々自身が「神の智恵(Gottes Weisheit)」に与ることが要求される。②はそのための実践的教導の内容をもつものと言えよう。そして③は②の実践的教導を通して得られた「無底的自由」の世界の開けを展開するものと言えよう。但し、ベーメの著作のなかではこれら三者の内容は必ずしも弁別されて論じられている訳ではない。それらは常に錯綜する形で展開されており、それが彼の著作を晦渋なものとする一因とも言える。
- 3 「無底(Ungrund)」とは文字通り、「無-底(Un-grund)」であり、あらゆる意味でのGrundとしてのあり方を拒否するものである。したがって、例えばここで述べたような「そこからそこへ」というような言い方そのものも最終的には否定されねばならない。
- 4 ベーメが使用する Spiel という言葉には、この「戯れ、遊び、遊戯」以外に、「自由自在の<活発な>動き、遊動、ひらめき、ゆらめき」等の意味も含まれていると考えられる(『現代独和辞典』、ロベルト・シンチンゲル、山本明、中原実共編、三修社参照)。ここでは、特に「遊び」において現われる「繰り返し」の円環的構造や沸き立つ「喜び」の感情等の特色を捉える意味において、前者の訳語を当てたい。
- 5 「無底」を「根拠」あるいは「基体」として立てるあり方からの脱却は、魂が「無底」の働きの現場そのものに参入することによってのみ完遂される。
- 6 この点が明らかとなるのは、註2で述べた③の著作においてである。

- 7 『エゼキエル書』の冒頭は次の言葉で始まる。「第三十年四月五日に、わたしがケバル川のほとりで、捕囚の人々のうちにいた時、天が開けて、神の幻を見た。」(『聖書』、1955年改訳、日本聖書協会、傍点筆者)。以下、エゼキエルの神の形容には繰り返し「輪」という言葉が使われている。
- 8 IV, 84-85参照。そこでは神の「根源態」を表わす「神の眼」の二重性がそのまま魂の眼の二重性の叙述へと移されている。
- 9 Frankenberg, A., *De Vita et Scriptis Jacobi Boehmii* (Bömes Werke, XXI, 15)
- 10 ヘーゲル、シェリングともに哲学史上のバーム思想の意義を認める発言をしている。
- ・ Hegel, G.W.F., *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie III*, G.W.F.Hegel Werke in zwanzig Bänden, 20, S.91-119, Suhrkamp, Frankfurt am Main 1971
 - ・ Schelling, F.W.J., *Zur Geschichte der neueren Philosophie, Münchener Vorlesungen*, Schellings Werke nach der Originalausgabe in neuer Anordnung herausgegeben von Manfred Schröter, X, S.190-192, München, 1965
- 11 Lemper, E.H., *Jakob Böhme. Leben und Werk*, S.120, Berlin, 1975
- Berdjajew, N., *Jakob Böhmes Lehre von Ungrund und Freiheit*, Blätter für deutsche Philosophie 6, S.315, Berlin 1932.
- 12 Weiss, V., *Die Gnosis Jakob Böhmes*, Zürich, 1955
- 13 Schulitz, J., *Jakob Böhme und die Kabbalah*, Frankfurt am Main, 1993
- 14 Schelling, F.W.J., *Einleitung in die Philosophie der Offenbarung*, Schellings Werke Sechster Ergänzungsband, S.129.
- シェリングはバームの無底を出発点とする思索を「自由なる思索」と呼び、また積極哲学を「自由な世界創造(eine freie Welterschöpfung)」を成し得る「自由な哲学」であると称する。(Ebenda, 132)

第一章 二つの原理の交互転入的關係としての神の根源態

さて、バームの思索を特色づけるものの一つとして先ず取り上げられるのは二つの原理の「対抗性(Widerwärtigkeit)」(IX, 167)¹⁾の問題である。それはバームの生涯を貫く根本的問いの一つである悪と禍の起源の問いから構想された概念である。例えば、彼は「なにゆえ神は苦痛に充ちた苦難の生を創造されたのか」という問いを立て、それに対する答えとして「いかなるものも対抗性なしにはそれ自身にとって顕となることはできない」と述べる。すなわち、すべて

のものが、神すらも自己還帰し、自己認識するためには「対抗性」を必要とするというのである²。ヴィクトール・ヴァイスは特にこの二つの原理の「対抗性」、すなわち対立問題がゲーメの全思索を規定していると述べ、そのグノーシスの由来を強調している³。

確かにゲーメの最初の作品である『黎明』の「二つの性質、善き性質と悪しき性質(2 Qualitäten,eine gute und eine böse)」(I, 24)の発想以来、二つの原理は「善と悪」、「光と闇」あるいは「火と光」等と言葉を変え、すべて存在するものの存在規定として、ゲーメの世界理解の根本原理となっている⁴。それは例えば「火がなければ光もない」(IV, 21)あるいは「苦悩のないところには喜びに溢れるものもない」(IV, 15)等の言葉において端的に表現されているが、結局のところ神的生命すらこの「対抗性」において成立し、働き、揺れ動くことを主張するものである。ただし、ここで注意すべきは、神的生命のうちではこの二つの原理は単なる対抗あるいは対立のうちにあるのではないということである。例えば次のようなゲーメの言葉がある。

神はあらゆる存在者の本質であり、そこには二つの存在者が一つのものうちに(永遠に)終わりも由来もなく存在する。すなわち、それは(1)神すなわち善である永遠の光と、それから(2)苦悶である永遠の闇とである。(II, 95)

ここで述べられているように「永遠の光」と「永遠の闇」とは単なる「二」ではない。また、単なる「一」でもない。そして、この両者が「一つのものうちに(永遠に)終わりも由来もなく存在する」ということこそ、まさにそれらが「無底的」にあるということの意味する。このことに関してベルジャーエフも指摘しているように、ゲーメは単なる二元論者でもなく、また単なる一元論者でもない⁵。またシュリッツはその意味でヴァイスのグノーシスの二元論的ゲーメ理解を批判している⁶。したがって、結論を先取りすれば、ゲーメの思索の究極原理は単なる一でも二でもなく、しかも一でも二でもあると言うべきものであり、そして、そういうダイナミズムが成立する現場として「無底」があるということである。第一章では特にこの点を明らかにしたい。

註

- 1 そこではすべてのものが「対抗性」なしには顕とならないことが強調されている。
- 2 ところでまたその「対抗性」が生じるためには「分閉性(Schiedlichkeit)」が必要で

あると述べられている。すなわち、神は本来「単一なる本質と意志」であり、「和合 (Temperamentum)」のうちにある。それが分開され、分開されたものが互いに葛藤に陥り、そこに「対抗性」が成立することによって初めて、神の自己認識、自己還帰が可能となると言うのである (IX, 168)。

Schulitz, J., ebenda, 59参照。

また、シュリッツはカバラとベーメの神智学は神のうちなる「原-分開(Ur-scheidung)」から出発すると述べている (Ebenda, 67)。

Leese, K., *Von Jakob Boehme zu Schelling*, S.16, Erfurt, 1927

この点、クルト・レーゼも明確にそれを「永遠なるものの原=行為(Ur=Tat)」として捉え、唯一神性の自己顕示のためには自己分裂が必要であることを指摘している。

3 Weiss, V., ebenda, 32-34

ベルジャーエフもベーメを最も偉大なグノーシス主義者であると言う (Ebenda, 315)。しかし、ヴァイスと違い、ベルジャーエフはベーメのグノーシスの発想を彼が人間主体の問題、特に「悪の問題についての苦悩」から出発するところに見ている (Ebenda, 319)。

4 ベーメの言う「性質」とは事物を動かし、湧出させ、駆り立てるものである (I, 24)。「二つの性質」はすべて存在するもののなかに、あたかも一つのものであるかのように存在すると述べられている (Ebenda)。このような意味での「二つの性質」すなわち「二つの原理」による存在理解を哲学的に整理した者として、ドイツ観念論者の一人であるシェリングの名前が上げられるであろう。彼の「実在的原理」と「観念的原理」あるいはBとAによる存在理解はこのベーメ的理解と軌を一にするとと言える。

5 Berdjajew, N., ebenda, 321

6 Schulitz, J., ebenda, 66

7 Ebenda, 52

シュリッツはこの点を、「一」でありながら「二つの互いに矛盾する意志のパラドックス」として取り出している。

第一節 永遠の無としての無底

ベーメのいわゆる神智学的叙述は「無底」としての神の叙述から始まる。それは先ずキリスト教的伝統的三一神以前の神の「根源態」を指示する¹⁾。そして、その「根源態」は先にも述べたように「無にして一切」と言われる極めて動的あり方を示している。それは「究めがたい永遠の無 (das unergründliche

ewige Nichts)」(VI, 4)であると同時に「永遠に産出する力(die ewig gebärende Kraft)」(XVII, 37)でもある。すなわち、それは一面「永遠の無(ein ewig Nichts)」(XVII, 5)であると言われるが、しかしまた他面そこには一切があり、またそこから一切が性起しているとも言われているのである(VI, 6)。ここではこのような二側面を持つと考えられる「無底」としての神の動的な「根源態」のあり方を明らかとする。

さて、先ず「無底」の「永遠なる無」としての側面について、例えばベーメは旧約聖書の一節を引用し次のように述べている(XV, 4)。神はある時は怒れる神、焼き尽くす炎であるが、またある時は慈悲深い愛の炎である。しかし、本来神について、これであるとかあれであるとか、また善であるとか悪であるとか言うことはできない。神は自己自身のうちに「区別(Unterscheide)」や「あるものへの傾き(Neiglichkeit zu etwas)」を持たない。というのは、神以前には善も悪もなく、神が傾くことができる何物もないからである。神は自己自身のうちにおいては「永遠の無」としての「無底」である。また、ベーメは別の箇所では「神は被造物に対する一者であり、永遠の無として、根底も初まりも場所ももたない」(XVII, 5)と述べ、そこにあるのは「存在者なき永遠の静寂(eine ewige Stille ohne Wesen)」、あるいは初まりも終わりもない「永遠の安息(eine ewige Ruhe)」のみであると述べている(V, 120)。

以上のような「永遠なる無」としての「無底」に関するベーメの叙述は一見ネガティヴに聞こえるが、決してそれはスタティックなものではなく、ニコライ・バルジャーエフも指摘するように²、ベーメはまさにこの「無底」において神的生命のダイナミックな生成過程を解明したと言えるのである。というのは、極めて逆説的ではあるが、「無底」はまさしく「無」であることにおいて善でも悪でも、光でも闇でもなく、しかもそれゆえにこそ善でも悪でもあり、光でも闇でもあるからである。換言するならば、「無底」はあらゆるものの「根源(Ursprung)」あるいは「根底(Grund)」であり、しかもまさにそのことによって、それ自身は「無」とであると言われるべきものなのである。このような「無」において、西谷啓治が明確に指摘するように³、またクルト・レーゼ⁴やバルジャーエフ⁵も言及するように、ベーメはプロティノスからエックハルトへと到る神秘主義の正統の流れのなかに位置づけられるのである。この「無」のもつ意味は極めて大きい。というのは、それはその極めて動的あり方において、すなわち特に魂との根源的関わりの中かで、より一層普遍的宗教的生のあり方を開示し、更にそれは単なるキリスト教的ロゴスに閉塞されないベーメの

思索の根源的開放性にもつながるからである。

註

- 1 Berdjajew, N., ebenda, 325

ベルジャーエフのペーメ理解の特色は「自由の根源性」すなわち、その「無底性」の理解をペーメから取り出すところにある(Ebenda, 327)。

- 2 Ebenda, 332-333, 319-20

ベルジャーエフはペーメの神理解、すなわち「神の誕生」や「神のうちの運動」の構想はギリシャ哲学や中世のスコラ学の静的な神把握に比して、最高度にダイナミックであると述べている。

- 3 西谷啓治、『西谷啓治著作集』第三巻、125頁

- 4 Leese, K., ebenda, 16

レーゼはこの「無底」に、エックハルトの「神性」、プロチノスの「一者」、クザーヌスの「反対の一致」等を見ている。

- 5 Berdjajew, N., ebenda, 325-326

ベルジャーエフはペーメの「無底」について、エックハルトの「神性と神との区別」に触れ、それは神が神性すなわち「言語に絶した無の深み」から現われ出るというドイツ神秘主義の最内奥の理念に繋がっていることを指摘している。その他、ヴァイスはここにグノーシス主義との関連を見る(Weiss, V., ebenda, 63-64)。また、シュリッツも「神性と神との区別」に触れている。(Schulitz, J., ebenda, 49-50)

第二節 眼あるいは鏡としての無底

前節で明らかにした点から、ペーメの「無底」とは先ず「永遠なる無」として、あれでもこれでもないことによって、まさにあれでもこれでもあるというダイナミズムが成立する現場であると言える。そして、そのダイナミズムは彼の場合、以下に述べるように、その「無」が他面直ちに「意志」であるところに成立しているのである。例えば彼は、神は善でも悪でもなく「永遠の無」として「無底」であることを述べたあと直ちに、「神は無であり一切である。そして、そのうちに世界と全創造が存する唯一なる意志である」(XV, 5)と述べている。このように「無底」が「意志」として働き出るところにペーメ思想の特異性があると言われるのであるが¹⁾、それはまさに「神秘(Mysterium)」としか形容のできない根源的事態であり、それをしばしばペーメは「眼(Auge)」

あるいは「鏡(Spiegel)」の譬喩において表現する。例えば次のように述べている。

自然の外では神は神秘である。すなわち、無のうちにある。まことに自然の外にあるのは無であり、それは永遠の眼、無底的眼である。その眼は無のうちであり、無のうちを見ており、まことにそれは無底である。そして、この眼は意志であり、すなわち、無を見出したいという顕示への憧れである。(XIV, 18)

「無」がこのような「眼」あるいは「鏡」であると形容されるところに既に「無」が単なる「無」ではないことが含意されている。すなわち、そこに潜む「意志」あるいは「憧れ」が言い表わされている。「眼」は何かを見て初めて「眼」であり、また「鏡」は何かを映して初めて「鏡」である。したがって、そこには当然何かを見ようとする、あるいは何かを映そうとする「憧れ」あるいは「意志」が含まれている。それは最終的には自己を顕にし、「自己自身を求めようとする意志」であると言われるが、その当初はいまだ見るものなき「眼」であり、また映すものなき「鏡」である。(IV, 12)

この「眼」あるいは「鏡」から「意志」が現われ出る経過を、例えばバームは凡そ次のように述べている。そこではただ「見ること」がすべてに先行する。そして、その「見ること」において「精神」が現われ出る。というのは、「精神」なしに「見ること」はなく、また「見ること」なしに「精神」もないからである。「無底」のうちには本来「根拠」も「目的」もない。しかし、この「見ること」において「精神」は自己のうちへ進み、自己のうちに「根拠」を造る。それが「意志」と呼ばれるものであり、この「意志=精神」の出現によって「神性」の自己把握が初まる。(VI, 4-6)

以上のような「眼」あるいは「鏡」の譬喩も、先の「エゼキエルの車輪」以上にバームの著作のなかに繰り返し現われる。しかもそれはその形、すなわち「球形」によって「エゼキエルの車輪」の譬喩にも重ねられる(IV, 31)。ただし、ここではそれは「眼」あるいは「鏡」のもつ特性、すなわち「見ること」あるいは「映すこと」によって、神の最原初の動きを解明するものとなっている。つまり、その動きがこの譬喩によって、神性の自己把握の衝動的意志として捉え直されているのである。後に彼の著作に添えられる図版において描かれることになる数々の「眼」は、そのヌーメンの効果において、まさに「無」

の最原初の不可思議な動きを伝えるものとなっている。

註

1 西谷啓治、同上、125-126頁

例えばベーメは「永遠なる無において永遠なる意志が性起する」(XIV, 10)と述べている。

また、ベーメの思想をこの「意志」の立場を根本とする「主意主義(Voluntarismus)」として捉える立場もある。例えば、下記の著作を参照。

Elert, W., *Die voluntaristische Mystik Jacob Bööhmes*, Berlin, 1913, S.5-6, 33ff.

2 Otto, R., *Das Heilige*, München, 1963, S.42

ルドルフ・オットーは「聖なるもの」を「ヌーメン的なもの(das Numinose)」と規定し、その背反的效果を、すなわちそれが「畏怖するもの(tremendum)」であると同時に「魅するもの(das Fascinans)」であるという性格を見事に取り出している。

3 ベーメ全集の扉絵を飾る神秘的銅版画は、J.G.Gichtelによって1682年にアムステルダムで編纂された最初の全集に添えられたものである(Weiss, V., ebenda, 86)。全集版の扉絵に使用されている図版の研究については Geissmar, C., *Das Auge Gottes, Bilder zur Jakob Böhme*, Wiesbaden, 1993を参照。

第三節 無と欲動、神の眼の二重性

さてベーメの場合、以上のような「眼」あるいは「鏡」において示された神性の根源的自己把握の動きのなかで、最終的には「無」から「あるもの」が性起すると考えられている。それは「意志」としての「無底」の働きにおいてであると言えるが、その意志発動の発端を彼は先ず次のように「欲動(Sucht)」という言葉において捉える。

無底は永遠の無である。しかし、それは一つの欲動として永遠の始源をなしている。実際、その無はあるものに向かう欲動なのである。(VIII, 97)

さきに「眼」あるいは「鏡」において表現された事態は、「無」としての「無底」が先ず、ここで述べられている「或るものに向かう欲動(eine Sucht nach Etwas)」であるということを示している。この「欲動」はまた「渴望(Begehren)」あるいは「牽引(Ziehen)」とも呼ばれているが、それは結局、理

知的には説明のつかない神の最原初の動きを言い表わしている。ただし、この「根源態」における動きは単に「あるもの」へと向かう動きに終わらない。その「欲動」は直ちにまた「無」であると言われている。このように「永遠の無」である「無底」が直ちに「或るものに向かう欲動」であるということ、そしてまた逆にその「欲動」が直ちに「無」であるということ、そういう根源的交互転入的事態をベーメは「魔術の永遠なる根源態(der ewige Urstand der Magiae)」と呼ぶのである(Ⅷ, 97-99)。

ところで、またこのような一方では「あるもの」へと向かい、同時に他方では「無」へと向かう「魔術的」あるいは「無底的」な「根源態」は次のような「神の眼」の二重性として表現されている。

そしてそれゆえ神の眼は二重である。そして、それは上に図*が示しているように背中合わせの状態にある(rücklich stehen)。一方は自己の前に、静かな永遠のなかへ、永遠の無のなかへ、すなわち自由のなかへと向かう。他方は自己の後へ、渴望のなかへと向かい、その渴望において闇を、そしてそこに自然の中心を造る。そして、それを大いなる不安と鋭さへと駆り立てる。(Ⅳ, 84)

※この神の眼の二重性を表わすものとして、拙論の最終頁に示したような図が『魂についての四十の問い』には取められている(Ⅳ, 30-31)。

この「神の眼」の二重性において表現されているように、「無」としての「無底」が動き始める発端のところから、その動きは交互転入的構造を以て捉えられている。そして、この動きの繰り返しのなかで「神性」の自己顕示は進展するとベーメは考えているのである₂。

註

1 Schulitz, J., ebenda, 52

シュリッツはこのベーメの「欲動」の働きを明確に捉えている。

Berdjajew, N., ebenda, 328 ベルジャーフは、この「無」が「或るものへの欲動」をもつところを「存在の原神秘(das Urmysterium des Seins)」と呼んでいる。

2 Weiss, V., ebenda, 20 ヴァイスは、このようなベーメの叙述の仕方を「螺旋的進行過(Spirale)」と呼んでいる。

第四節 欲動と意志、火と光との戯れ

さて、前節で述べた神の「根源態」における交互転入的動きは、またさらに次のような「螺旋的進行過程」において叙述されている。すなわち、先の「欲動」を母胎として、それとは別の「意志」が生み出される。この「意志」は「欲動」が「魔術」と呼ばれるのに対して「魔術を行なう者(Magus)」と呼ばれる。そして、それは「欲動」の渴望的・牽引的動きを支配・統治する。それゆえ、この「意志」は「欲動の理知(der Verstand der Sucht)」と呼ばれる。

「欲動」は「渴望」であり、「生命」である。そして、「意志」はこの「欲動」から自由であり、それを支配するものである。彼はこの「意志」の働きを「意志=精神(Wille=Geist)」と呼び、これに対して先の「躍動する欲動の生命(das rägende Leben der Sucht)」を「自然」と呼ぶ。この両者はいずれも先にはなく、ともに無始であり、互いに他の原因である。この両者はまた「二つの神秘」と呼ばれ、さらに前者は「精神=生命」、後者は「自然=生命」とも名付けられている。そして、この「二つの生命」は「唯一永遠の無底的根源態」から、またその「根源態」において存する。以上のようにベーメは述べている(Ⅷ, 97-100)¹。

このように「無」としての「無底」が「欲動」として動き、さらにその「欲動」から「意志」が生まれる。しかも、それらの動きは決して直進的ではなく、それぞれの局面で交互転入的である。このような「根源態」における交互転入的動きこそベーメの思索の根幹を成す動きである。そして、それが「火と光(Feuer und Licht)」との「戯れ」として取り出されるのである。すなわち、先ず「火」は先の「渴望」に重ねられ、この「火」がなければすべて「無にして無底(Nichts und Ungrund)」であると言われる。ただし、またさらにこの「火」は「光」と分離されず、神はこの「二つの原理」をもつものとして永遠から一切であり、その神以前には何もものない。それゆえ、そこからまた神は「根底にして無底(Grund und Ungrund)」である。ここにおいて「永遠から二つの原理があった」と言われるのであるが、それは神的生命の「根源態」が、この「火と光」として、永遠からそれぞれ「根底」も「始源」もなく、すなわち「無底的」にあることを意味する。ただし、ここではまだ「或るもの(etwas)」が生じている訳ではない。そこにあるのは「火と光」との「靈的交互遊戯(ein geistlich Spiel ineinander)」である。(Ⅴ, 4-8)

以上のように「無底的根源態」は「二つの原理」あるいは「二つの神秘」あ

るいは「二つの生命」が、永遠からなんらの「根底」や「始源」なしにあるところである。換言するならば「無底」はこのようにその両者が交互転入的に働き合う現場である。そして、先に述べたようにバームはこの「無底」を「エゼキエルの車輪」すなわち「あらゆる方向へ進む丸い球形の車輪」に譬えるのである。そして、更にこのような極めて動的な神性の「根源態」の展開をバームは上述したように「神の戯れ」と言い表わすのである。この点をさらに鮮明に取り出せるのが、次章で取り扱う「七つの性質」についての記述である。

註

- 1 西谷啓治、同書、130-131 ところで西谷は、意志と欲動との「相互転入的」あり方を指摘し、神全体が「相互転入の輪転」を成していることを明示している。

第二章 円環運動としての神の根源態

さて、フランツ・フォン・バーダーは、バームが神の生命を「進展(Progress)」であると同時に「後退(Regress)」であるような「円環運動(Kreisbewegung)」において捉えていると述べている¹。前章で述べたように「二つの原理」によって捉えられた神の「根源態」も既に交互転入的動きを示していたが、それをまさに「エゼキエルの車輪」の譬えが示すような回転運動において捉えるのが「七つの性質」である。

註

- 1 Baader, F., *Vorlesungen über die Lehre Jacob Böhme's mit besonderer Beziehung auf dessen Schrift: Mysterium Magnum*, S. 165-167, Sämtliche Werke, XIII, Leipzig, 1855

第一節 戯れとしての七つの性質の円環運動

神の「根源態」が初まりも終わりもない「輪」としてあるあり方は、バームの最初の作品である『アウローラ』以来、繰り返し述べられている事柄である。そのあり方がより詳細に展開されているのが「七つの性質」に関する叙述である。「七つの性質」は先の「二つの原理」あるいは「二つの神秘」と呼ばれたものが、さらに神のうちに遡源され、その内容がより一層詳しく展開されたも

のと考えられる。例えば、『アウローラ』のなかでも、この世界を動かす二種の原動力である「二つの性質」の分析の後に、神のうちなる「七つの性質」についての詳論がある。そこでは「七つの性質」として次のものが上げられている。すなわち、①「渋い性質(herbe Qualität)」、②「甘い性質(süße Qualität)」、③「苦い性質(bittere Qualität)」、④「熱(Hitze)」、⑤「愛(Liebe)」、⑥「響きあるいは音(Schall oder Ton)」、⑦「体(Corpus)」である(以上、I, 85-129参照)。ここではそれぞれの性質についての細かい議論は割愛するが、「七つの性質」相互の円環的あり方については、例えば次のような記述がある。

神の七つの霊*はすべてが互いに生まれる。一つのは常に他のものを産み。いずれも最初のものでなく、またいずれも最後のものでもない。最後のものが最初のを産み、最初のもものが第二のもの、第三、第四、最後のものまで産む。・・・というのは、それらはみな七つとも等しく永遠であり、いずれのものも始まりも終わりももたないからである。(I, 114)

※この「七つの性質」の「性質」はここで述べられているように「霊(Geist)」あるいは「形態(Gestalt)」、「相(Species)」等と呼ばれ、その説明の視点は著作によって若干異なるが内容的にはほぼ一貫している。

このような「七つの性質」の交互・円環的あり方をバームはまた「戯れ」と表現するのである。すなわち、バームによると神性は静止しているのではなく、絶え間なく働き、ちょうどそれは二人の造られた者が「大いなる愛」のなかで互いに戯れ合っているようなものである。またそれは七人の人間の「朗らかな嬉戯(ein freundliches Freuden= Spiel)」にも譬えられている(I, 138)。すなわち、一人の者が他の者に勝てば、第三の者が負けたものを助けに現われ、かくて彼らの間に楽しい「遊び(Kurtzweil)」が成立する。これは彼らがみな一つの「愛の意志」をもち、しかも互いに「遊びあるいは愛」において戦うからである。ここには「喜びと至福(Freude und Wonne)」(I, 124)以外のものはない。バームはこのような「七つの性質」のあり方を「神の聖なる戯れ(ein heiliges Spiel Gottes)」と呼ぶのである(I, 180)。

第二節 二重の円環運動

さて、前節で述べたような「七つの性質」はバームの晩年の著作に到るまで、微妙にその名称あるいは意味合いを転じながら展開される。そして、その展相

過程のなかで、先の「二つの原理」さらには「三つの原理」との関わりにおいて、それらのより一層ダイナミックなあり方が解明される。すなわち、「七つの性質」は第四の性質を分岐点として第一から第三までと第五から第七までとに分けられ、神の「根源態」は前者から後者への転換あるいは両者の交互転入関係として明らかにされるのである。すなわち、そこでは先の神の「根源態」における「二つの原理」のあり方が、「七つの性質」を介して、以下のようにより一層詳細に展開されるのである。

①第一の性質は「渋味」と呼ばれる。この性質の引き起こす収縮作用は先には「欲動」あるいは「渴望」の働きとして表現されていた。それは磁氣的牽引に譬えられているが、神性の意志はこの「渋味」において自己を収縮し圧縮することによって自己把捉しようとする(XX, 87)。そして、その作用において「暗闇」が惹き起こされる。神性の意志はこの性質がなければ「無」であり、そこには「永遠の静寂」以外のものはない(IV, 9, III, 20)。したがって、この性質は「母胎(Matrix)」あるいは「万物の原因(eine Ursache aller Dinge)」と呼ばれる(II, 65)。

②第二の性質は「苦味」と呼ばれる。それは第一の性質の作用に対する反作用として生じ、「渋味」において引き寄せられ圧縮されたものを多なるものと分ける(XX, 85)。第一の性質によって引き起こされたものが「暗闇」であったのに対して、第二の性質はそこから自由であろうとする。というのは、そもそも神性の意志は「暗闇」に留まることを欲せず、「光」を渴望するからである(VI, 10)。

③第三の性質は「不安」である。第一の性質は自己のうちへ(in sich)向かい、第二の性質は自己からそとへ(aus sich)出ようとする。しかも両者一つであり、互いに離れることはできない。かくてそれらは「回転する車輪(ein drehendes Rad)」(XVIII, 14-15)のようになる。そして、その「回転する車輪」のような動きのなかで「大いなる不安(die grosse Angst)」(XIV, 198)が生じる。

④第四の性質は「火の閃光(Feuer=Blitz)」と呼ばれる。第一と第二の性質との相互作用において生じる「回転する車輪」のような動きのなかで、第三の性質である「不安」はますます高まる。そして、その車輪は砕け飛びそうなほど荒れ狂うようになる。しかし、その不安の一極点で突如「火の閃光」が走る。そして、その「閃光」を受ける「驚愕(Schrack)」の瞬間、それまで暗く硬かった「原質」は突然光り輝く柔和なものとなる。すなわち、「火」が点火され、

一転して喜びに溢れた誕生の回転運動が始まるのである。この「火の点火」によって初めて、「闇」の原理である第一の原理と「光」の原理である第二の原理とが分離される。その意味で第四の「火の閃光」は「分岐点(Scheideziel)」と呼ばれる。(Ⅱ, 12, 16-17, 22-23, XX, 95)

⑤第五の性質は「愛」と呼ばれる。この「愛」は「火」から生まれ、他のすべての性質のうちに住み、それらを「柔和な愛」へ変える。そこにはもはや苦痛も敵対も見い出せない。諸性質は「光」のうちでみな平衡状態のうちにある。この第五の性質は先の第三の性質の「不安」と対を成し、すべての生命の根源としての聖霊の働きを現わす。(Ⅱ, 18, XX, 92)

⑥第六の性質は「音」と呼ばれる。この性質の登場によって、第五の性質のうちで平衡状態にあった諸性質が分離され、「聞き得る(lautbar)」ものとなる。この性質は第二の性質の「苦味」とともに子の働きを現わす。(Ⅱ, 18, XX, 86, 94)

⑦第七の性質は「体(Corpus)」と呼ばれる。この性質において他の諸性質の働きは身体的に結集・統合される。この「体」において喜びに溢れた「愛の戯れ」が現成する。この性質は第一の性質の「渋味」とともに父の働きを顕にする。(Ⅰ, 128-129, XX, 95)

以上、「七つの性質」は第四の性質を分岐点として、第一から第三の性質と第五から第七の性質とへ分けられる。前者において生じた不安な回転運動は、「火の閃光」によって後者の喜びに溢れる「愛の戯れ」へと転換される。あるいは、むしろこの両者の動きは同時的であり、前者の回転運動はそのまま後者の「愛の戯れ」である。すなわち、神性の自己展開はこのような二重の円環運動のなかで螺旋的に進行するのである。そして、このような円環運動のなかで生成する「体」が神のうちの「自然」であり、その「自然」において神は自己顕示を果たすのである。

註

- 1 バーダーはこれを「永遠に不幸な円環運動(die ewig unselige Kreisbewegung)」と名付ける(Ebenda, 167)。
- 2 レーゼはこの「自然」に注目し、それがエティンガーを介してペーメからシェリングへと継承された重要な発想であると考えている(Ebenda, 6)。そして、ペーメはその「自然」のもとで「神の身体性(die Leiblichkeit Gottes)」を理解していると述べ、それ

はまだ悪の起源とは関わりがないことを強調している (Ebenda, 18-19)。

第三節 三つの原理

「三つの原理」とは言うまでもなく、ペーメ的な三一神論の展開であり、それは先の「七つの性質」の展開のうちにも既に包含されていたものである。すなわち、彼はその「七つの性質」のうちの第一と第七の性質の働きは父に、第二と第六の性質の働きは子に、第三と第五の性質の働きは聖霊に帰している (XX, 95)。そういう仕方であって先の二重の円環的運動のなかに潜在していたものが、その螺旋的進行のなかで、形を変えて顕在化するものが「三つの原理」と言える。そして、「七つの性質」の円環運動はいまだ永遠の世界における永遠の出来事であったが、「三つの原理」はこの二重の円環運動を更に新たな局面へと導く切っ掛けとなるものである。すなわち、「七つの性質」のうちの最初の三つの性質で構成されるものがここでは第一の原理と呼ばれ、最後の三つの性質で構成されるものが第二の原理と呼ばれる。そして、この両原理の交互転入的關係のなかで顕在化する第三の原理によって、先の永遠の円環運動は新たな局面へ、すなわち或る意味でその運動の完成へと導かれるのである。シュリッツはこれを「第一の循環 (der erste Zyklus)」と呼び、そこで一旦「神性の生成」が完成すると述べている¹⁾。

ところで、この「三つの原理」を理解する手掛かりになるものとして次のようなペーメの言葉がある。

闇の原質が第一の原理であり、光の力が第二の原理であり、光の力による闇からの産出が第三の原理である。(II, 68-69)

第一の原理は先ずここにあるように「闇の原質 (die Quall der Finsterniß)」と呼ばれる。そして、別の箇所では第二の原理は「光の原質 (die Quall des Lichtes)」、第三の原理は「この世界の原質 (die Quall dieser Welt)」と呼ばれている (II, 105)。ただし、ここで先ず注意すべきは、この第三の原理によって直ちに悪と禍に満ちた我々の世界が創造されると考えられてはならないということである。先に述べたように、この「三つの原理」によって神性の自己展開はここで一旦その完成へと導かれるのである。その完成する相は、ペーメの場合また特に注意すべきであるが、父・子・聖霊に、更に「智恵 (Weisheit)」の契

機を付け加えた形で示されている²。例えば、次のような記述がある。

かくして、(1)無底的意志は永遠なる父と呼ばれる。(2)そして、見いだされ、把握され、産み出された無底の意志はその産み出された子、ひとり子と呼ばれる。というのは、子は無底の存在であり、そこにおいて無底は根底において自己を捉えるからである。(3)そして、この把握された子あるいは存在を通しての無底的意志の外発は霊と呼ばれる。というのは、それは把握された存在を自己から意志の躍動あるいは生命のなかへ、すなわち父と子との生命のなかへと導くからである。(4)そして外発したものは、永遠なる無が見いだされたものとしての喜悦である。ここでは父と子と霊とは内的に自己を見、かつ見いだす。そして、それは神の智慧あるは観照と呼ばれる。(XV, 6)

このようにペーメにおいては「神性の生成」は「三つの原理」を介して「智慧の自己観照」において一旦完成すると考えられている。しかも、その「自己観照」のなかで神はまた「自己自身と戯れ」、喜びに充ち溢れているのである(XV, 7-8)。したがって、この段階において第三の原理によって現出した世界はいまだ「競い合う愛の戯れ」のうちにあり、そこは「永遠の創造されざる天(der ewige, ungeschaffene Himmel)」あるいは「神の場所(die Stätte Gottes)」あるいはパラダイスと呼ばれる(XV, 39)。

以上のような「三つの原理」による新たな局面への展開は、更に次の段階で天使の創造やルチフェルの墮落の問題を介して、いわゆるキリスト教的目的論的な直線的動きへと転換される。その転換の要となる問題は悪と禍の問題である。ペーメの最大の関心はまさにこの問題にある。本来は神の「根源態」にあって喜びに溢れていた世界が、何故に憎しみと争いに満ちたこの世界となったのか。それはペーメによると、創造の原初にまで遡源しうる出来事に由来しており、神性の力は常にその本来の均衡を取り戻そうとして働き、そしてそこから今、この世界は悪を通して善へ、あるいは闇を通して光へと導く強力な目的論的意志が働く世界となったと考えられているのである。この点についての展開は更に魂の起源の問題等の詳しい究明が必要とされる。

註

1 Schulitz, J., ebenda, 52-53

シュリッツはこの神自身の生成に、さらに神的自然の生成および宇宙の生成が続く

と考えている。

2 西谷啓治、同上、136頁参照。

この第四の契機である「智恵」について、西谷啓治はそれは三者の融合面、すなわち三者の相互転入から生じる「一」であると述べている。また西谷は、「無底」が三者の顕示以前の「一」であるのに対して、「智恵」は三者顕示以後の「一」であり、その「投射的対象(Gegenwurf)」であると述べている。

Schulitz, J., ebenda, 62

シュリッツはこの「智恵」の契機のベーメの思想展開における意義に注目する。そして、ベーメの立場は純粋に神学的でも、また純粋に哲学的でもないと述べている。というのは、ベーメにおいてはロゴスではなく「智恵」が「神性の顕示の媒体」として働いていると考えられるからである。

おわりに

拙論では、ヤーコプ・ベーメの神を、主に「二つの原理」と「七つの性質」という彼の思想展開の要となっている考えを中心に取出した。ベーメは本論で述べたように先ず神の「根源態」を「二つの原理」の交互転入的關係として、あるいは「七つの性質」の円環運動として構想していた。それはキリスト教的三一神以前の神の「根源態」であり、そこにはいわゆる目的論的神とは異質の神の根源相が看取された。この神の「根源態」は、勿論そこに様々な思想の系譜を読み取ることも可能であるが、飽く迄彼の神秘主義的経験を核に掴み取られて来たものである。そして、そういう仕方でも、その経験の深みから再把握された言葉によって彼独自の世界が形成されているのである。そして、更に注目すべきは、そのような彼独自の世界には、単なるキリスト教的ロゴスのうちに閉塞されない、したがって異質のロゴスとの交流を可能とするような自由な思索の場が開かれているということである。具体的には例えばそれがベーメに錬金術やカバラ思想の摂取を可能としたと言えるであろう。

彼の自由な思索のうちには勿論彼が生きた時代の精神を見て取ることも可能である。また、それにはキリスト教神学に縛られない彼の一人の靴職人としての立場、あるいは彼の知的教養の出所も大きく関係していると言える。しかし、同じ時代に生きた人々のなかでも彼が抜きん出て自由な宗教的思索家となり得た原因は、一つには彼の真摯な生活姿勢に求めることができるであろう。また、取り分けそのような生活姿勢から到り得た宗教的生の深みに、キリスト教的口

ゴスの徹底を介して、自由な思索の場が切り開かれたとすべきであろう。

ベーメの「無底」としての神は、キリスト教的三一神以前の神であり、ドイツ神秘主義のいわゆる「神性の無」に繋がる。その「無底」の具体相を捉えるものが拙論で取り出した「二つの原理」の交互転入的關係であり、あるいは「七つの性質」の円環運動である。そこに既に指摘したように、グノーシス主義やユダヤ神秘主義との類似性を見ることも可能であろう。また、そこにネガティブにキリスト教にとっての異端思想を嗅ぎ取ることも可能であろう。しかし、拙論はそこにキリスト教的ロゴスの徹底を介して開かれた、より一層普遍的宗教的生の立場を、また先にも述べたように、そこから可能となるベーメの思索の根源的開放性を見る。しかし、更にまたそこから全く異質な歴史的・宗教的文脈のうちにあるものとの対話の可能性を探るためには、なおベーメにおける魂の問題、あるいは世界の問題を探る必要がある。殊に前者の魂の問題はベーメ思想の解明の鍵となるものであり、その魂の「神の戯れ」への参与は全く新たな世界理解の可能性を開くものとなるであろう。この点に関する展開は他日を期したい。

